

日本人研究者のグローバル化に向けて
－米国大学院留学生数は日中で 40 倍の格差－

前国際通貨基金（IMF）理事 梶川幹夫

米国の大学で日本人留学生の存在感が急速に低下しています。米国 Institute of International Education の調査によれば、この十年間で米国大学院に学ぶ日本人留学生は 8,025 人から 3,125 人へと半減以下になりました。これに対して中国人留学生は同時期に 47,617 人から 123,250 人へと倍増以上の勢いです。その結果、中国人留学生数は日本人留学生数の約 40 倍という状況に至っています。筆者は 1980 年代半ばに米国大学院に留学していました。当時は企業や官庁からの派遣留学生も多く、日本人はオーバープレゼンスとさえ言われていましたが、全く様変わりです。現在の米国大学のキャンパスを歩くとアジア人で溢れている印象を受けますが、そのほとんどは中国人やインド人です。

昨年まで筆者の勤務していた国際通貨基金（IMF）は、主に米国有力大学の経済学博士号取得者を採用していますが、昨今では日本人の応募者、合格者が極めて乏しい状況です。それに対して中国や韓国からの採用者は増加の一途です。上記のような留学生の状況を受けて、日本人応募者のプール自体が小さくなっていることも一つの要因です。（注 1）

自然科学系の分野でも同様の状況が起きているようです。英国調査機関から全米第一位の評価を受けているカリフォルニア工科大学でも、学位取得を目指す日本人留学生は全学で 10 人程度に減少しているとのこと。日本経済新聞の記事によれば、AI の研究分野でも米中が 2 強という状況になっており、特に米中の共同研究が突出しているとのことでした。同紙によれば、中国人留学生が帰国後に共同研究する例が多いとのことでした。（注 2）

このような状況に対しては様々な考え方があると思います。日本の大学や企業の研究環境はそれなりに充実しており、もはや米国で学ぶ必要はないという面もあると思います。一方、中国や韓国からは、米国移民になってでもいいので片道切符で米国教育を目指す学生が多いというのも確かだと思います。更には少子化が進展する中で若者の「内向き志向」が高まっているという批判も聞かれます。

しかしながら、このまま進んで行くと日本の人材がグローバルなネットワークから弾き出されてしまう恐れはないでしょうか？冒頭に述べたように日中の留学生数の比は 40 倍までに広がっています。中国人やインド人を核とするネットワークは、世界中の大学や国際機関に広がりつつあるように見えます。その一方で、日本の多くの大学、研究機関、企業、官庁などでは、今や人事システムが確立されて、それぞれで日本人の人材を抱え込んでい

ます。日本から見ると、外国組織はあくまで一時派遣したり交流したりするものに過ぎないようです。日本以外の国では所属組織の「本籍地」のような概念は一般的ではなく、人材は広く流動化しているように思います。米国大学から欧州研究機関に移籍したり、投資銀行から国際機関に転職したりすることは、一般的に見られます。翻って日本の組織で、自分の研究室の大学生を外国の博士課程に送り出したり、国際機関から転職してきた外国人上司に仕えたりすることに抵抗はないでしょうか？むしろ「内向き」なのは、既存の日本組織なのかも知れません。

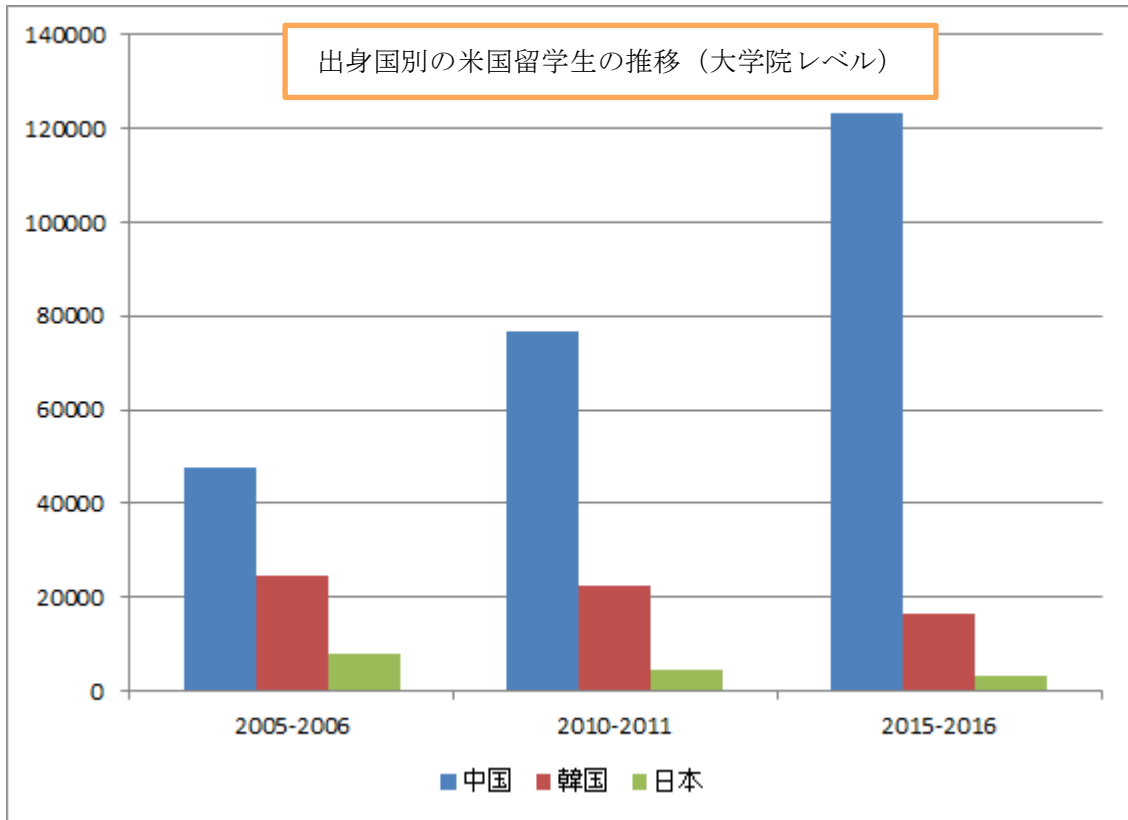
JDC 財団では、在米日本人留学生への支援を開始したと承知しています。彼らは日本型組織の枠の外に敢えて出て行った方々です。在米留学生と日本企業や研究機関との交流を図ることは、両者にとって良い刺激になると思います。財団の活動は、日本人研究者のグローバル化に貢献されるものと期待しています。

(注1) IMF では日本政府と協働し、IMF への就職を目指す日本人留学生に奨学金を支給しています。ご関心のある方は、以下の HP をご覧ください。

<https://japanimfscholarship.org>

<https://www.imf.org/external/np/ins/english/scholar.htm>

(注2) 2016年12月9日(金) 日本経済新聞夕刊1面



Institute of International Education の調査より作成

<http://www.iie.org/Research-and-Publications/Open-Doors>